紀　　要

第 7 号

目　　次

二つの前方後円墳 ……(細川修平)… 1
滋賀県出土の埴輪資料集(その4) ……(稲垣正宏)… 27
近江へのアプローチ・その1 …… 43
　1．高島郡の地形と条里 ……(神保忠宏)… 44
　2．高島郡における遺跡の動態　―今津町周辺をフィールドに― …(畑中英二)… 50
　3．高島郡の古代寺院 ……(重岡　卓)… 57
　4．高島郡の鉄生産とその周辺 ……(大道和人)… 61
　5．高島郡の古代北陸道 ……(内田保之)… 66
　6．高島郡にみる古代国家 ……(細川修平)… 71
南北方位建物についての研究ノート ……(田井中洋介)… 77
近江京域論の再検討・予察―7世紀における近江南部地域の諸相― …(相原嘉之)… 83
滋賀県における古代の土器様相・その1
　―湖南地域における無台杯身・かえり付き蓋の変遷を中心に― ……(畑中英二)…104
江州農具雑想ノート ……(上垣幸徳)…126
滋賀県甲賀郡土山町における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布
　―土山町石造美術石材分布調査概要― ……(兼康保明)…131
滋賀県内出土漆製品集成―後編― ……(中川正人)…145

1994．3

財団法人滋賀県文化財保護協会

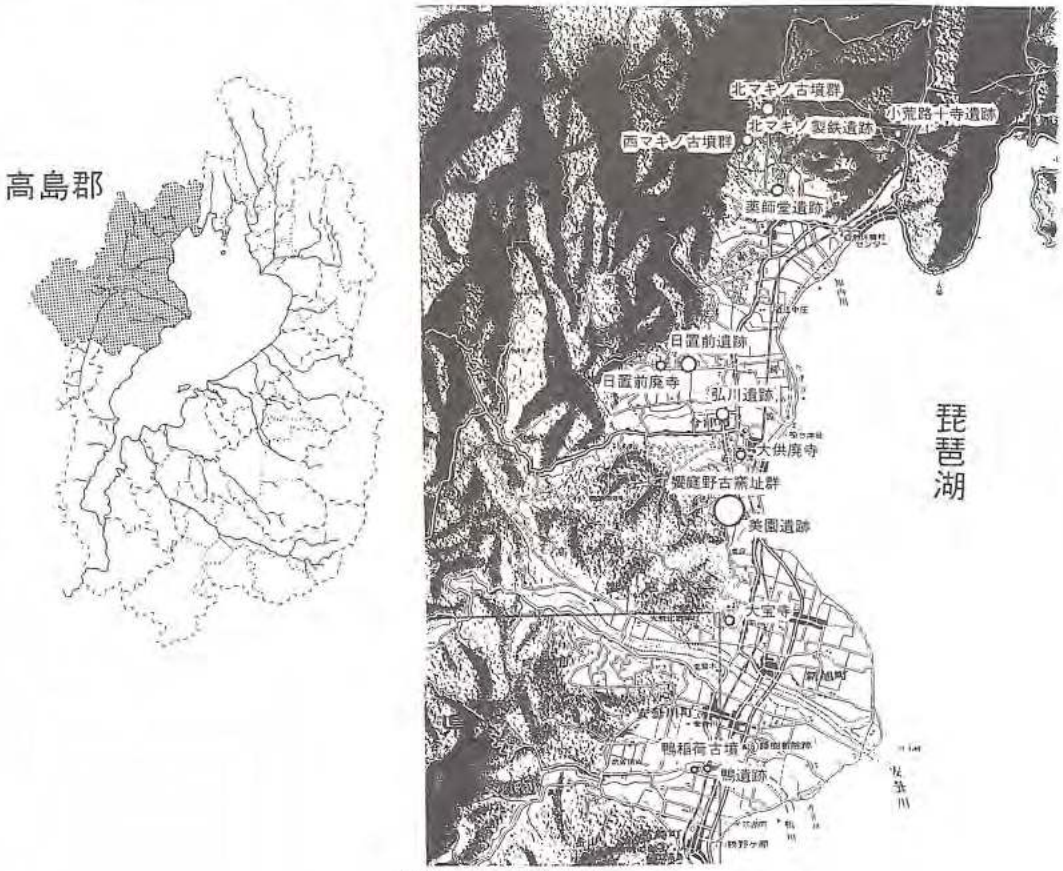
近江へのアプローチ・その1

はじめに

近年、発掘調査によってもたらさせる資料数は極めて膨大で、個々の資料そのものが持つ問題点も多岐にわたり枚挙に暇がない。考古資料を中心に用いた一地域史の叙述は極めて困難な作業であるといえる。小稿は「近江」を中心とする地域研究という日暮れて道遠いこの作業を、財団法人滋賀県文化財保護協会の有志による共同研究を行い、少しでも前進させようという試みである。

今回は、滋賀県北西部に位置する高島郡の地域史について、古代を中心とする時代の地形と条里、古代道の復元、遺跡の立地の特性、瓦の動向、手工業生産(鉄生産)、古墳時代から古代にかけての国家との関わりについてふれることとした。

これらのアプローチで全ての問題についてふれているとはいえないが、地域研究の一助となることを願うものである。また、個々の論考については諸兄姉からの御教示、御批判を賜りたい。



今回ふれる主な遺跡

6．高島郡にみる古代国家

細　川　修　平

「共同研究のまとめを書け！」という課題を与えられたが、個性豊かな各執筆者の各論考をまとめるなどと恐ろしいこと、私の立場・力量で可能なはずがない。かと言って、何もしないと言う訳にもいかない。仕方がないので各論考は無視し、6世紀から8世紀にかけて、所謂「古代国家成立期」の高島郡の状況を、自分の視点で概説することによって「まとめ」としておこう。

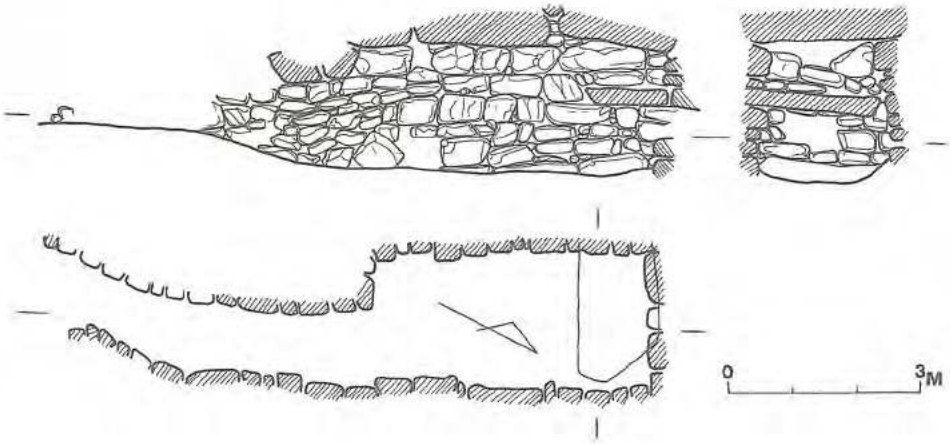
1．高島郡の登場

高島郡が古代社会の中に自己を表現する最初の考古資料は、鴨稲荷山古墳である。その内容についての詳細は省略するが、まさに突然的に造営された高島郡唯一の前方後円墳であり、しかも奈良藤木古墳と比較しうるだけの副葬品を持っていた。こうした古墳が突然的に造営される背景については、継体朝から欽明朝に至る政治状況の評価を下す必要が存在であろうが[1]、ここでは、隣国若狭の脇袋古墳群の造営の停止を大きな契機として評価しておきたい[2]。脇袋古墳群は5世紀代に安定した前方後円墳の造営を行い、4世紀代に丹後地域が独占的に掌握していた日本海の海上交通権を、但馬地域などと分割しつつも継承していった主体と考えられている。こうした脇袋古墳群の造営停止は、もはや独占的な海上交通権の掌握が不可能となり、それが、制度的、機構的に整備されるに至る状況を意味する。こうした時代に造営される鴨稲荷山古墳は、日本海の海上交通－その港の一つである若狭から畿内への陸路を含めて－の一端を管理する人格の墓制と考えることが可能である。すなわち、高島郡が古代社会の中に自己を表現した最初の契機が、若狭との関係、あるいは若狭を見据えた交通の問題に求められるのである。

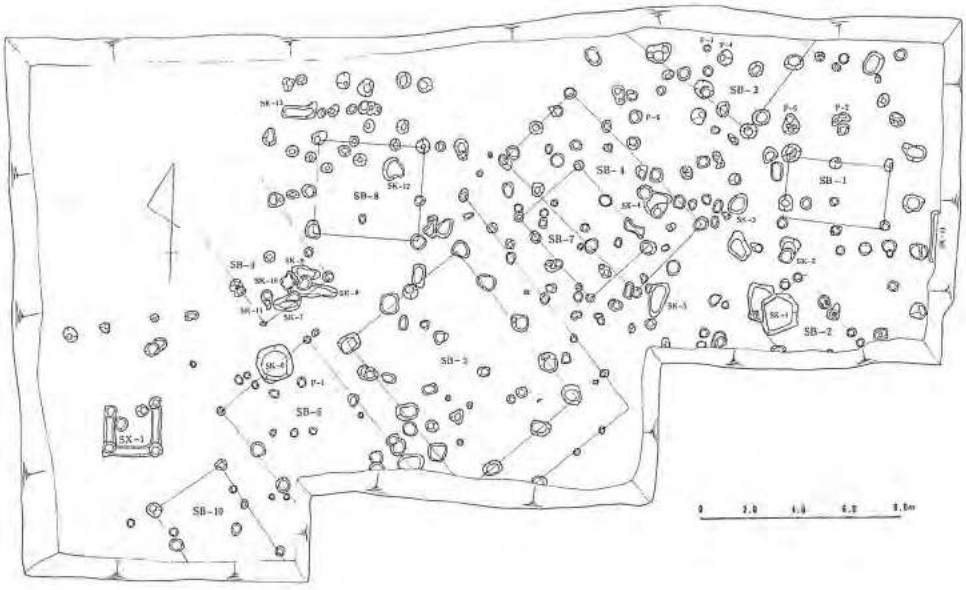
次に、高島郡の古代を考える時に問題となるのは、その鉄生産が何時開始されるのかと言う点である。この問題については既に詳しく述べられているので、ここではマキノ町薬師堂遺跡と斎頼塚古墳について見ておきたい。薬師堂遺跡は、6世紀後半代に成立する集落遺跡であるが[3]、その時点で既に掘立柱建物のみで構成され、しかも主軸をそろえ、柵等の区画施設を伴うという特徴が指摘できる。こうした特徴はいわゆる豪族居館のものである。全体像が不明であり結論は出せないが、薬師堂遺跡には階層的に上位のものが居住していた点は確かであろう。

斎頼塚古墳は西牧野古墳群の中の1基であるが、他の古墳とは異なった立地を示し、群集墳とは峻別して扱うべきである。さて、発掘調査が実施されておらず詳細は不明であるが、確実なものでは近江唯一の石棚を有する石室で、その構造から6世紀中様を若干すぎた頃の造営が考えられる[4]。すなわち、近江内では早い段階で、しかも他とは異なる技術導入を行うことによって、横穴式石室墳の造営を達成したのである。しかも、前代までの古墳が全く存在しないという点を評価すれば、そうした集団があらたにこの地に移住してきた可能性も考えられる。

このように「豪族居館」の存在や石棚付き石室の導入が、即時に鉄生産の開始とは結びつかないが、マキノ町域が6世紀に至り、近江はもちろん高島郡内においても極めて特殊な発達を示す



第1図　マキノ斎頼塚古墳横穴式石室



第2図　マキノ町薬師堂遺跡

点は明らかであり、こうした特殊な発達の延長線上に鉄生産を考えることは決して不可能ではないだろう。6世紀代からの鉄生産を認めるか否かはともかく、6世紀代のこうした状況を無視したところで、高島の鉄背景は理解できないのである。

以上で見たように6世紀代の高島郡は、若狭との関係や「鉄生産を視野に入れた」特殊な開発状況によって、古代社会の中で自己を表現し、大きな変貌への助走を加速する。

2．高島郡の変化

7世紀になれば、美園遺跡に見る確実な豪族居館の成立や、土器生産の開始、あるいは大宝寺の造営などさらなる開発の進展が確認される。その中で確認しておきたい事実は、7世紀前半の高島郡を南北に分けた場合、南すなわち安曇川・鴨川流域が優位にたっている点である。具体的には美園遺跡と大宝寺遺跡、あるいは饗庭野古窯址群の成立である。集落遺跡については発掘調査の進展の差異もあるが、大宝寺が早くも大化前代に造営されている点は、それが近江においても穴太廃寺、衣川廃寺につぐ造営である事実を考えれば[5]、この段階になって高島郡南部が有力になった例証としては、これ以上のものはないだろう。こうした南部優位の傾向は鴨稲荷山古墳以来の現象であり、鴨稲荷山古墳の存在や美園遺跡の位置から考えれば、若狭との関係を契機として南部が優位に立ったと考えることも可能である。この場合、現在知られている若狭街道とは異なり、日爪地区付近から饗庭野をぬけて若狭へ向かう道が使用されていた可能性が強い。

こうした傾向は、7世紀中葉の大津宮の時代になれば大きく変化する。北部における遺跡群が本格的に登場するのである。寺院跡で見れば、大宝寺に替わって大供廃寺が本格的に造営される。軒丸瓦からは、南滋賀廃寺や穴太廃寺との強い関係が想定できる。また、弘部野遺跡や大供遺跡など段丘上の遺跡の本格的出現期にも当たる。こうした状況は、本格的な段丘上の開発という畿内的傾向と一致し、これ自体「律令的」現象と理解できる[6]。所謂「古代の開発」とされるものが高島郡においても実施されつつある状況が読み取れるのである。しかも、一方、大供廃寺の軒丸瓦が大津宮周辺寺院と密接な関係がある事実からすれば、大津宮の造営にともない近江の豪族層を再編成し官人として登用していった動きとの関連も考えられる[7]。少なくとも大宝寺が全く大津宮時代の瓦を使用していない事実との対比は必要である。

さらに、今津町内の遺跡群の動向には、北陸道、若狭街道の整備が関係する可能性を考えてみたい。推定される街道に沿い多くの遺跡が吸い寄せられるように成立する。これらの遺跡群が本格的に展開するのは8世紀に入ってからであるが、7世紀後半には大供遺跡や美園遺跡などにその萌芽が認められる。遺跡が先か道が先か、こうした問題には立ち入りたくはないが、各地の事例からも、7世紀後半代には北陸道が整備された可能性は高いと言わざるを得ない。またこの場合、古墳時代以来の道を利用していた7世紀前半代の遺跡の動向との差異も明らかにしたいところである。例えば、美園遺跡は7世紀の後半以降その性格を大きく変化させるが[8]、その変化の時点が北陸道の設置と一致する可能性が高い。

こうしてみれば、「律令的開発」、「大津宮」、「北陸道の付設」、など7世紀代の諸政策が複雑に関連し、7世紀後半代の高島郡の遺跡の動向が決定されている事実が判明する。特に8世紀かけて大きく展開する、「今津を中心とする高島郡北部の遺跡群の動向は、」まさにそうした「律令時

代へのステップ」の集積と理解されねばならない。今後、遺跡群の詳細な年代的研究を進め、それぞれの現象の起因する事象を明確に後付けることによって、大津宮の影響や街道の整備など高島郡の古代社会の成立過程が明らかになるだろう。

3．高島郡における古代国家の成立

こうした動向の結果である8世紀は段丘上の遺跡群の盛行で説明される。その代表となるのが日置前遺跡である。8町四方とも言われる広大な範囲に拡がる遺跡で、あるいは官衙遺跡（高島郡衙）とも考えられている。確かに柵で区画された大型の建物などが存在するが、倉庫と通常の掘立柱建物がセットになる傾向や竪穴住居から遺跡が形成される点からすれば、通常の集落遺跡と考えるべき点も多い。日置前遺跡の立地する付近は、近世においても水田開発が不可能であった。日置前遺跡を単純に農村と考えることはできないが、畑作等による開発や、あるいはこの段階には確実に開始されている製鉄などの開発との関連も考えられる。あるいは、広く低地部の集落からの集団的移動の可能性も高い。すなわち、段丘上に遺跡が大きく展開する状況は、弘川・上野原遺跡や美園・栗屋田遺跡群においても認められるものであり、日置前遺跡のみを特別視することができないのである。この段階の段丘の下面すなわち低地部における動向については不明な点が多いが、比較的調査例の多い今津町内や新旭町内において低地部の遺跡群がほとんど知られていない事実からすれば、段丘上の集落遺跡の盛行は、平地部の集落遺跡の大半が移動した結果とも考えられる。言い換えれば、7世紀から続く、開発、大津宮、官道整備などの諸政策の到達点が、集落の移動に具体化される「地域およびその内部の人間の再編成」であったと読み取れるのではないであろうか。資料が少なく、この結論については今後の課題となる部分であるが、段丘上の遺跡の評価については、低地部の遺跡の動向と同時になされねばならない点を確認しておきたい。

さて、こうした状況の中で、8世紀中葉の弘川遺跡は築地堀で囲まれた部分を持ち、こらを郷倉と考えるか郡衙と考えるかはともかく[9]、これは地域支配のための公的権力の現れと理解されるべきものである。すなわち、ここにおいて具体的な「古代国家」の姿が認められるのである。ただし、弘川遺跡の一つの遺構群のみをもって「古代国家」の姿を見るべきものではない。6世紀以降高島郡で着実に進められた諸政策－開発、流通など－の具体的な現れとして、先に想定することが可能であった「集落の段丘上への移動＝地域・人間の再編成」が実施された、その時空的中央に弘川遺跡の遺構群が成立することに、「古代国家」の姿を見出さねばならないのである。考古学的に何を「古代国家」とするか、また、歴史学として「古代国家」をどのように規定するか、今その議論を行うだけの力量は持たないが、少なくとも6世紀以降高島郡で認められた遺跡群の動態こそ、考古学的な「古代国家」の一つの過程の表現と見出すことはできないであろうか。まさにここにおいて高島郡に「古代国家」が成立したのである。

4．結語

以上6世紀から8世紀にかけての高島郡の状況を再度概観することによって、「古代国家」が誕生する過程を見てきた。箇条書き的記述で意味不明な点も多いと思うが、6世紀から8世紀にかけて、これは急激かつ着実な変化の繰り返しであると理解いただけよう。このどれをもって画期

とし、どれをもって終局とするのか現時点において理論を設定することは不可能である。あるいは、いずれの事象も、互いに関連し、複雑な網目模様の中に展開していると結論付けるべきものかもしれない。

ただし、高島郡の中から「古代国家」を見据えることは必要であるが、高島郡の中から「古代国家」の画期＝理論を設定することは、なお、慎重になすべき課題でもある。高島郡で明かにし得た一連の変化を他地域の状況と比較し、言わばエンドレスのこの作業を繰り返すことによって、初めて「画期＝歴史の一般性」が見えてくるものである。今回の研究は、まさにその最初の一歩にすぎないのである。同時に、我々が共同研究という方法を選んだ最大の理由も、ここに存在するのである。決して、「古代」に固執するつもりはないが。

それはともかく、まだまだ高島郡において解明すべき課題が多い。高島郡では9世紀になれば、鴨遺跡が成立する。その内容は明らかにされていないが、ここでは弘川遺跡との比較により「古代国家」の変質過程が読み取れるであろう。また、古代高島郡で常に問題となる製鉄についても、その経済的背景のみではなく、それが「藤原氏」を媒体とした国家の地域支配の中で、どのような位置を占めたのか、といった視点からの分析も必要になるであろう。さらに9世紀頃から次第に条里が施行されるが、それについてもどのような地域の再編成を意味し、何が中世へと引き継がれるのかについても分析されねばならないだろう。まだまだ、課題は存在する。それを我々のみの課題とせず、読者の方々へも投げかけておいて、結びとしたい。

なお、我々の共同研究において、今津町教育委員会　葛原秀雄氏、新旭町教育委員会　長井秀之氏、高島町教育委員会　白井忠雄氏の各氏からは、種々のご教示、ご協力を得た。末筆ながら記して謝意を表しておきたい。

註

(1) いわゆる5世紀後半から6世紀前半にかけての政治状況であり、考古学的には「大王墓古墳群」の解体する段階にあたる。詳細は省略するが、「畿内政権」の最高支配者集団がもはや古墳群を形成し、「同族関係」を確認する必要がなくなった段階、すなわち、支配者集団が機構として成立した段階と考えている。

(2) 高橋克壽「若狭の埴輪と地域政権」(『躍動する若狭の王者たち』　福井県立若狭歴史民族資料館　1991年)

(3) マキノ町教育委員会　㈶滋賀県文化財保護協会　『薬師堂遺跡発掘調査報告書』1985年

(4) 白井忠雄「高島郡の横穴式石室について」(『滋賀考古』第7号　1992年)

(5) 大宝寺出土の豊浦寺系の軒丸瓦については、その特徴である有陵線弁の表現が、陰刻となっており、これから新しく考える立場も存在する。しかし、弁の先端の表現などは穴太廃寺出土瓦と共通する特徴である。これから、穴太廃寺とさほど大きな時間差を考える必要はないと考えておきたい。

(6) 広瀬和雄「古代の開発」(『考古学研究』118号　1983年)

(7) 細川修平「南滋賀町廃寺の建立」(『滋賀考古学論叢』第5集　1992年)

(8) 7世紀前半の豪族居館が解体した後の美園遺跡は、倉庫と掘立柱建物で構成される。日置前遺跡や上野原遺跡と共通する形態である。

(9) 地域において築地塀が用いられるのは、正道遺跡や御館前遺跡など「郡衙」推定遺跡に限られるようである。

編集後記

今年度は雨が多く冷夏であり、どの現場もいたずらに排水作業を繰り返し時間に追われて苦悩の日々を過されたことと思います。本紀要も、第7号を迎え、本号には予想を越える14編の論考を掲載することが出来ました。調査に追われながらも、日頃の各自の問題意識と研鑽の結果であるといえるでしょう。本号が「近江」や「文化財」への理解の一助となり、読者の方々からの御指導、御鞭撻が賜れれば幸いです。

5701 K
滋賀県文化財保護協会蔵書
256

平成6年3月

紀　要　第7号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印　　刷　宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241